板書例

1 読む前に・第一段・第二段

読む前に
・「待つ」とはどんな行為？
・物語のかたちに注目
→一人称小説　「私」の視点で進む
・時代をおさえよう
→「大戦争」（「私」＝「二十歳の娘」）

第一段
「誰とも、分からぬ人」を迎えに

第二段
誰を待っているのか？
・人間でないかもしれない
・人間が嫌い　人間が怖い

◆「私」の変化
「大戦争」前
儀礼的なつきあいに違和感を抱く
母との親密な関係性を大切にする
「大戦争が始まって」から
画一化していく周囲に不安と孤独を感じる
◆「大戦争」…「（十七年一月）」
→昭和十六（一九四一）年十二月八日・真珠湾攻撃　《調べてみよう》

2 第三段・第四段

第三段
落ち着かない気持ちを抱えた「私」が向かう先→駅

◆何かを待つ「私」の心
期待→恐怖→諦め→覚悟
白昼の夢
→非現実的な空想
望遠鏡を逆にのぞいたみたい
→目の前を行き交う人々が、遠く小さく見える
…「私」の孤独をあらわす
「けしからぬ空想」「淫らな女」「軽はずみな空想」「不埒な計画」
→自分（自分が考えたこと）を否定的に捉える「私」

第四段
◆繰り返される問い
「誰を待っているのだろう」
旦那さま→恋人→お友達→お金→亡霊
…全て否定する「私」

3 第五段・まとめ

第五段
◆「私」が「待つ」ものもっと和やかな、ぱっと明るい、すばらしいもの→春のようなもの
→青葉→五月→麦畑を流れる清水
←どれも違う、けれども
胸を躍らせて…希望
一心に一心に…ひたむきな態度
◆不安であっても孤独であっても
「待つ」ことを選んだ「私」
◆「あなた」の違い
第四段落の「あなた」
→「私」に声を掛ける人
⇔
第五段落の「あなた」
→「胸を躍らせて待って」いるもの、「私」の物語を読んでいた読者

まとめ 書いてみよう
言語活動 1　時代状況／テーマ
言語活動 2　「私」／作者
作家紹介 太宰治
…戦時下の創作活動